

恩師西村雅吉先生を偲ぶ

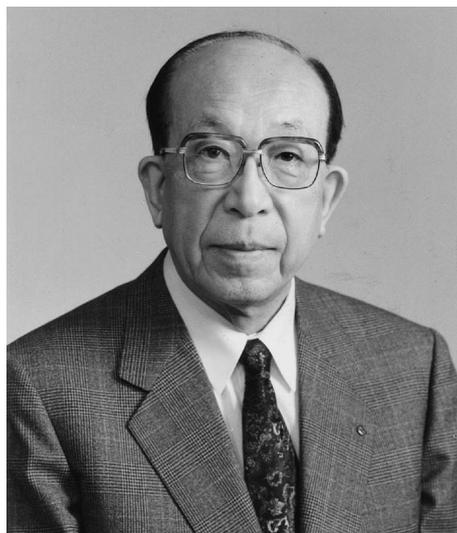
大正6年7月4日旭川市で生まれる。北海道帝国大学予科を経て昭和15年北海道帝国大学理学部化学科卒業。ただちに、同理学部助手に任用される。昭和18年同理学部大学院特別研究生となった後、昭和20年同理学部講師、昭和21年に理学部助教授に昇任。昭和30年「温泉に関する若干の地球化学的研究」により理学博士。昭和34年から2年間、米ミネソタ大学において「隕石中の垂鉛の研究」を行う。昭和40年北海道大学水産学部水産化学科に新設された分析化学講座の教授となる。昭和41年度本会北海道支部長。昭和52年「天然水中の微量無機成分分析に関する研究」により、本会学会賞受賞。昭和54年北海道大学評議員。昭和55年本会副会長。昭和56年北海道大学定年退職、名誉教授。昭和66年本会名誉会員。平成7年勲三等旭日中綬章。

去る、平成28年9月19日、西村雅吉本会名誉会員が静かにその生涯を閉じられました。享年99。ご葬儀は、生前の強い、強いご意向により家族・親族のみで執り行われた旨の連絡を受けました。会員の皆様にご報告するとともに、ただただ、先生に感謝してご冥福をお祈り申し上げたいと思います。会員番号は「5」でした。本会創立当初からの主要なメンバーの一人として本会発展にご尽力されました。

先生は「紳士」でありました。このことは、同僚、後輩そして私たち弟子達が口をそろえて評した言葉です。背が高く、いつもキチンとしていて、物静かでありました。「大学教授」「学究の徒」と言う表現がこれほど似合う人はそう多くはおりません。その人柄はそのまま研究態度・内容に表れておりました。先生の研究の中心は、温泉水、海水、雨水など天然水中の微量成分の分析と地球上での挙動に関するものでした。天然試料の分析には、試料の採取、保存、定量分析からデータの解析まで、細心の化学的視点で吟味することの大切さを事ある毎に口にされていて、自らもそれを実践されておりました。

先生の著書、環境化学（裳華房）のコラム欄に、「毒はあったら毒なのか」があります。その内容は、1) この水道水に水銀が検出された、2) 水銀は毒である、3) ゆえに、この水道水は毒である。この3段階論法についての言及であります。この種の議論が先生は嫌いでありました。言うまでもないことでありますが「量」の議論が抜けているからです。これは、この問題に限ったことではなく、どんな事柄についても「条件」を良く判断する必要の重要性を教えてください。

先生は分析化学の基礎に忠実に研究を進めておられました。大きな業績の一つに「海水中の水銀の定量」に関するものがあります。今では、クリーン採水器で海水を採取して、テフロン製容器に保存して、クリーンルーム内で「コンタミ」なしで測定できますが、研究を開始した1970年当時は、(もちろん、テフロン製のボトルなどは手に入らなかった)ので海水の保存のための条件を決めるために容器の種類から検討しなければなりません。そして、その成果は、1975年カナダで開催された「天然水に関するシンポジウム」において発表されました。分析化学的緻密さと正確さが国際的に大きな反



響を呼んだ発表になりました。「条件」を大事にする先生のモットーが大きく花開いた瞬間でありました。

先生の研究に対する向き合い方の一つに「面白がる」ということが挙げられます。「うん。面白いね!」。どんなに些細なことにでも「面白味」を見いだすことの大切さを強調されておりました。多くの人が面白がることだけが、面白い、と考えたらダメ。自身の視点で物事を「面白がる」ことが大事だよ! 先生との研究を、修士2年の時に、分析化学の一流の国際誌に投稿した時のことでした。3か月程たったお昼に、珍しくお弁当をもってこられなく、昼食に誘われました。近くのレストランでした。おもむろに、「Air Mail」を取り出して、「実はね、このあいだの論文がリジェクトになったんだよ」と切り出されました。悲しい顔に見えたのでしょう、「内容は間違っていない。ただ、レフリーと面白味の感覚が一致しなかった、んだよ」。先生の弟子に対する暖かい、なんとも表現のし難いあの時の言葉は忘れることができません。

先生はお酒には減法強く、どんなに杯を重ねても全く表情・態度が変わることがありませんでした。学位の研究にもなった「温泉水」の採取の時には、リュックに一升瓶を目いっぱい詰め込んで出かけたそうです。前夜は、温泉宿で胃袋をアルコールで「よく」洗浄して瓶を空にし、採取用に準備したというお話も伺いました。研究室の会合の2次会は、決まって、先生のお宅に押し掛けて奥様の手料理をご馳走になり、夜更けまで大いに飲んで、手拍子で唄ったものでした。奥様の暖かいお人柄も強く心に残っております。ほとんど毎日、奥様が車で送り迎えをされておりました。朝、奥様が運転する車から降りてきた先生の蝶ネクタイ姿をみて、函館にも夏が来たことを感じたのも、つい、この間のことのように蘇ってきます。

この度は、先生から教えを頂いた多くの方々を代表して悼むことになりました。長年にわたるご指導とご厚誼に感謝して心静かに手を合わせて…ありがとうございました。

〔北海道大学名誉教授 乗木新一郎〕